

復活節第2主日（神のいつくしみの主日）

第一朗読 使徒言行録 2・42-47

第二朗読 一ペトロ 1・3-9

福音朗読 ヨハネ 20・19-31

2026.4.12

カトリック高円寺教会 9:30

ニティン助祭(イエズス会)

兄弟姉妹の皆さん、おはようございます。

今日は復活節第2主日ですが、教会は「神のいつくしみの主日」としてお祝いします。

「いつくしみ」について考えるとき、わたしはナポレオン・ボナパルトと、ある熱心な母親の物語を思い出します。

ナポレオンの軍の一人の兵士が、重い罪を犯して死刑判決を受けました。その兵士の母親は、息子のためにナポレオンに何度も赦しを願いました。しかしナポレオンはそれを断り、こう言いました。「婦人よ、あなたの息子は赦しにふさわしい(値する)ことをしたのですか？」

それを聞いて母親は答えました。「陛下、もし息子が赦しにふさわしい人間なら、それは『いつくしみ』とは呼びません。ふさわしくないからこそ、わたしはいつくしみをお願いしているのです。」

ナポレオンはこの母親の言葉の真理に心を打たれ、その兵士にいつくしみを与えました。

「ふさわしくないからこそ、いつくしみである」という真理を、神様は忘れることはありません。しかし、わたしたち人間はそれを忘れてしまいがちです。時々、わたしたちは自分の罪深さのせいで「自分は神の愛を受けるに値しない」と感じ、神様から離れてしまうことがあります。しかし、忘れてはならないのは、わたしたちがふさわしくないからこそ、神様はいつくしみを与えてくださるということです。

今日の福音の中に、その神のいつくしみが見えます。復活されたキリストは、受難のときに自分を捨てて逃げた弟子たちの前に現れました。怖がっている弟子たちに対し、キリストは責めることなく、「平和があるように」と言われました。

キリストのいつくしみはそれだけではありません。弟子たちに「罪を赦す権能」を与え、ゆるしの秘跡を定められました。わたしたちが罪の汚れから癒やされ、より聖なるものへと歩めるようにしてくださったのです。

聖トマスの場合でも同じです。主は、信じられないトマスに対して怒るのではなく、優しくご自分の傷口を見せ、彼が必要としている方法で寄り添われました。キリストは、トマスがいたその場所に、そして今わたしたちがいるそれぞれの立場に、いつくしみを持って会いに来てくださるのです。

第二朗読で聖ペトロが教えているように、神の最大のいつくしみはキリストご自身です。キリストの復活によってわたしたちが新しく生まれ、神の子とされたことは、まさに大きないつくしみです。

そして、いつくしみを受けたわたしたちは、それを自分の生活の中で生きていくことが大切です。もしナポレオンから赦された兵士が、また同じ罪に戻ってしまったら、それは母親の愛を無駄にすることになります。今日の第一朗読では、初期の教会の人々がどのようにいつくしみを生きていたかが紹介されています。共に祈り、ミサを捧げ、困っている人々を助け合っていました。

わたしたちも同じです。大きな助けができなくても、隣人に笑顔で挨拶をしたり、相手の話を親身に聴いたりすること、そのような小さなことから「いつくしみ」を実践していきましょう。

神のいつくしみについて聖ファウスティナが受け取ったメッセージは、「神のいつくしみを超える罪はない」ということです。

神のいつくしみを信じ、自分の弱さを恐れずに「ゆるしの秘跡」を受けながら、共に聖なる歩みを続けていきましょう。

父と子と聖霊のみ名によって。アーメン。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>